只見短歌会　令和五年九月詠草

逝きし娘の三十七回忌も過ぎれども迎へ火焚けば帰り来る気のする　馬場　八智

幼時期の孫はわが名を皆言へず下のひと文字言ふは愛らし　目黒　富子

日常に精いっぱいの事なりて思ひばかりが忙しく過ぐ　関谷登美子

リビングに散らかるおもちゃよそこをどけよちよちよちと我が息子(こ)が歩く　立花　奏音

「黒真珠」母の好みしバラ咲きて見ぬまま逝きし墓前に供ふ　新国由紀子

音読は脳が元気になると言ふ雑誌を見つつ声出し読みぬ　渡部ヨリ子

美しく老いよと書き添へいただきし敦盛草(あつもりそう)の蕾ふくらむ　故　新国　洋子（遺　作）

只見俳句会　九月定例会　日高俊平太　指導

なお紅し母が好みし千日紅　都

友去りて早一年走馬灯　修一

松明かし今年の影は妻と我

遠雷も眠り薬の昼寝かな　信

うとうとと老いて気ままな昼寝かな　味代子

黒とんぼ雲間に流れる羽の光　恒夫

秋深し友と語りぬ去年の酒

秋澄むや人なき里の夕間暮れ　真理子

萩の花興きたる風をいちはやく

秋暑ししきりに跳ねる池の鯉　礼

屋板の鳥ゴソゴソッと熱帯夜

水面から入道雲湧く田子倉湖

畦道のこころよき風稲の出穂

しばらくの小字(こあざ)丸ごと夕焼かな　一穂

農道に泥落とし行くコンバイン

窓開けて秋風入れよ茶の間まで